



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第四十二号

2024/3/28 発行

題字：高橋弘美

二ヶ月ぶりに雑誌を発行するが、この間ずいぶんいろいろあって、言語表現が急に面倒になったというか、まどろっこしい感じになったというか、そういうこともあるのだから、わからないものである。

ものなど書く人がいつ言葉との関係に目ざめるのか、つまり言葉というものが自分にとって特別なものらしいといつ気がつくのか、わからないが、わたしの場合、そのことに気がついたのがそもそもずいぶん遅かった。思い返してみると、わたしの自己表現の手段は幼少期から思春期にかけてずっと絵だったように思うが、あるとき、絵というものはなにやら専門的な練習や勉強が必要な分野らしいということを知って、面倒になってやめてしまった。言語表現がわたしの中でこんなに支配的な地位を占めるようになったのはそのあとではないかと思うのだが、先日ふと、それはみんな間違いだったのではないかと思った。間違いというと云いすぎだが、少なくともなにか巨大な幻想のようなものに引きずられていたのではないかと思った。これはどうも一大事なので、以下に少し詳しく書いてみることにする。

今号の内容

小舟に乗って
後記に代えて

小舟に乗って

のつけからなにやら人を脅かすようなことを書いていたが、これは一種のスランプ状態ではないかと云えば、そうとも云えるかもしれない。スランプ状態を、これまで易々とできていたことができなくなったりという意味にとらえれば、ある意味そうかもしれないと思う。

もつともこれも正確ではなくて、いま現にわたしがこうしてこの文章を書いているように、別に文が書けなくなったわけではないのである。およそ生きている限り、文章がまったく書けないなどということはおそらくあり得ないので、これは特定の運動がある日突然うまくできなくなったというのとはまた話があるようにも思われる。

しかしいまこうしてパソコンの前に座って、とても高価だったかわりにおそろしく打ちごこち（などという言葉はなさそうだが）のいいキーボードに向かって文字をカチャカチャ打っている、このわたしというものが、どうもわたし自身と少

しずれているような気がする。先月皆さんに犯罪小説集をお送りしたときのわたしは、ひとたび机の前に座ってパソコンを広げ、指をキーボードに置けば、もうなにもしなくても指が動きはじめ、文章はわが指先から流れ出た。それはわたしの意識状態や体調とは本質的にあまり関係がなく、わたしは安心してキーボードに指を置いているだけでよかったのである。書きたいことは向こうからやってきたし、書くべき文章も向こうから勝手にやってきて、勝手に画面に打ち出されていった。

わたし自身、その瞬間を楽しみにしていて、その瞬間のために生きていた。散歩をしていても、わたしはそのときに眺めている景色を頭の中でつい文章にしてしまうくせがあった。この空をなんと表現すべきか、あの山の鬱蒼とした木々をいかなる言葉でもって伝えるべきか、今日の柔らかな日差しのことをどういふ言葉でもって表現したらもつとも適切であり美しいか。

なにか心動かされる光景に出くわしたとき、それを言葉にして表現しようとするのは、ものを書く人間ならある意味当然の行為かもしれないのだが、最近のわたしはそれがどうも気持ち悪いのである。そういうことをしてなんになるかとまでは云わないが、美しい景色は美しい景色であって、心でそれを感じればよく、白鳥が美しいのは単に白鳥が美しいので、ただそれを眺めていればいい

のではないか。なんだってそれを言語化する必要があるのか。その言葉というやつは、いったいなんのために存在するのか、世界はおまえが言葉によって表現するために作られたとでもいうのか、と近ごろのわたしは思うのである。

ものを書かざるを得ない人は確かにいる。しかしものを書かざるを得ない人とは、言葉に憑かれた人のことを意味するわけではないはずである。その人はもちろん、やむにやまれずそうするのが、そのやむにやまれぬものは、見たものを見たはしからどう表現するかということを考えるような頭とは、まるで別のところに由来するもののはずである。

もちろん、言語表現も一種の技術だから、訓練すればするだけうまくなる。そしてその訓練が好きななら、その人はおそらくかなりうまくなるだろう。その人はきっと、ありとあらゆるものを描写できるようになり、ありとあらゆるものを表現できるようになるに違いない。ある意味で言葉のプロである。こうなったら、もうこの人にできないことはないのです、こんな愉快なことではない。この人はすべてを言葉にして理解する。言葉にするためにこの人の理解はある。この人にとって、言語表現のためにすべては存在する。そしてこの人はプロだから、それらをとでも上手に言語化し、人にわかるように書くだろう。

この人がさらにお話を作る才能まで持ち合わせている場合には、この人はたぶん小説家になる。というか、自分自身をそう定義する。この人は言葉で仕事し、言葉で表現するので、それが自己自身の生命活動であると思いはじめる。自分自身は言葉とともにあり、世界は言葉とともにあり、言葉は世界であり、すべては言葉である。はじめに言葉があった。神は言葉であった。言葉は神であった。この人は神であり神になる。すべてを知り、その創造の秘密を知る神になる。

ところで、生命とは言葉であろうか。

この単純な疑問が、この人の頭に生涯芽ばえないとしたら、この人は幸せな人である。この人はあくまで言葉の迷宮の中で、言葉の海の中で生涯を終える。この人はそれを世界の豊穡さだと思いきみ、世界の懐だと思いきむ。その懐の中に自分を抱かれていて、その懐は自分であり、その懐を作ったのも自分だとこの人は素直に思いきむに違いない。それは傲慢さというより、素朴な思い違いに似ている。人間が誰しも犯す、逃れがたい過ちのひとつに似ている。でもこれは誤りである。生命は決して言葉ではない。生命は言葉からは生まれない。言葉は生命を理解する助けになり、それにかかりの程度近づき、ほとんど肉薄することができるかもしれないけれども、でも言葉は生命

自身ではない。神は言葉であったかもしれない。そしてはじめに言葉があったかもしれない、その人の認識にとつては。でも認識は世界ではないし、認識は生命ではない。生命はその外に、というよりそれを包みこむものの中に満ちていて、その中で言葉は独裁国家の君主みたいふるまっているのだが、それをあわれみをもって見つめているひとつのまなざしがあることに、この独裁者はおそらく死ぬまで気がつかない。

あるときわたしは、このまなざしがわたしを見つめるのを見た。わたしはこの目と目が合った。そしてわたし自身は王国は崩壊してしまった。わたしはいまでは世界ではないし、創造主でもないし、世界の理解者でも、それを定義する者でも分析する者でも、まして表現する者でもないことに気がついてしまった。わたしは実に何者でもなく、なにも知ってはいなかった。わたしは広大な生命の海を前に途方に暮れた。わたしの言語活動は波にのまれてどこかへ沈んでしまった。わたしは一艘の小舟に乗ってその海に浮かんでいたが、小舟はひどく小さくて頼りなかった。手元には舟を漕ぎ進めるための櫂もなく、わたしはただ波のゆらゆら揺れるのにいたずらに身を任せているよりほかにすべがなかった。だがやがて、それでいいのだという気がしはじめた。わたしには櫂は必要ないのだし、ただこのまま波に身を任せて漂ってい

ればそれでいいのだという気がした。そう思ったとたんに、わたしはなんだか夢から覚めたように思ったのである。実に長い夢から覚めたように思ったのである。そして言葉というやつを脇に置いて、あたりをただ見つめることをしはじめたのである。

ただ見つめる者に言葉はあまりいらぬ。白鳥は相変わらず白鳥であるし、空は空であるし、山は山であるのだが、それもなにかどうでもいいことのように思える。白鳥を白鳥と、空を空と、山を山としたときに、どうしてもこぼれ落ちてゆくものがそこにある、そのこぼれ落ちてゆくものを、そのものを救済するために言葉があると思つたが、そのものは別に言葉による救済など必要としないのだ。それを云ってしまえば、なにものも別に言葉による救済など必要としないのだ。すべてのものはただそのものであるといふだけで、それだけで満ち足りているのであつて、それ以上のものはなにもないのだ。満ち足りていないのはむしろわたしの言葉であつて、わたしの言葉というものがそれ自身のために言葉というものを必要としているだけなのだ。有り体に云えば、わたしの活動などその程度のものであることを、わたしは知つた。

最近、なにを思ったのか、のろのろした散歩が競歩になり、いま競歩が少しづつジョギングになりつつある。こんな強度の高い運動をしたのははじめてのことだし、そんなものに乗り出すことになるとはまったく思っていなかったのだが、こういう負荷の高い運動というのはよいものである。どんよりとよどんでいた体が一気に覚醒するような感覚がある。

昔は、走ると苦しくて仕方がなかった。心拍数が上がるとすぐに息が上がって切れてしまい、横断歩道を走って渡っただけでゼゼエハアハアやっていたものであるが、子どものころのそれは小児ぜんそくの影響であったにしろ、長じてからのその苦しみは、どうも単にわたしの姿勢の悪さが心肺機能を圧迫していただけだったような気がする。

ヨガをやると肩が開き胸郭が広がる。胸郭が広がると呼吸が深く楽になる。呼吸が深く楽になると、心臓がバクバクいつているのにつられて浅く速い呼吸をしなくてもよくなる。むしろ心拍数など少しも上がっていないような顔をして、とにかく一定のペースで大きく息を吸って吐いてをくり返していると、別にそれほど息が苦しいものでもない。苦しいのは自分の呼吸が下手なためで、十分に酸素を吸って吐いてやれば、体は案外平気で走っていられるものらしい。

いま書いたようなことは、スポーツの専門家などに読ませたら失笑を買うようなものかもしれないのだが、わたしがこの体でもって自分で発見したことは、誰がなんといおうと真実であるに違いない。わたしの体はほかのどの体でもなく、ほかのどのような物質でもなくて、ただわたしの体である。その体が四十年も生きて、いまさらこういうことに気がついた、そのことはなにか非常に尊いことであって、この四十年がなかったならば、その発見はついぞ生まれ得なかったろうし、あと一年早くても遅くてもだめだったろう。

わたしはときおりダイエットや体重のことを問題にするが、いまのわたしは別に痩せたいから運動したいとか、痩せるためになにかしなくてはとは思っていない。痩せるか太るか、むしろ自分のコントロールを超えたところにあるなにかものであるように思っている。わたしは別に太っていないし、いまの体でもなんの支障もなく十分やっつけていけることは、ヨガやなにかで証明済みである。痩せたくないと思っているわけでもないが、いずれにしても体というものとはただ体というものなのであって、それに美醜の問題を持ちこんであれこれ述べる前に、もっとほかに知るべき多くのものを体は備えている。それらはわたしの体にもぬかりなく備わっているので、それに脂肪を十キロ二十キロと足していったところで、その機能が

失われるわけでもなく、また十キロ二十キロと引いていったところで、機能が増えるわけでもないのである。それらはその形の美醜を問題にしてあれこれ述べるには、なにかあまりに尊すぎるもののように、いまのわたしには思われる。

わたしの体はどこまで行けるか、わたしの生命はどこまで行けるのか。それはこの地上でなにをなすのか。もしも女に生まれ、子どもを産むなら、それはこの地上で、体において非常に大きなことをなしたことになる。だがそれだけではなくて、体にはまだまだおそるべき能力が数多く眠っているような気がする。それはとんでもない適応力と柔軟性を備えており、わたしが求めればどこまでも応じてくれそうにも見える。わたしはいま生まれてはじめて、自分の体のことを驚嘆とともに眺めているのであって、わたしの生命というものをなにかおそるべきものとして見ているのである。そこに言語によって表現すべき関係はないし、言語によって表現されねばならない何ものも、実は存在していない。それはわたしであり、わたし自身である。わたし自身が生命であって、わたしがどこかへそれを置き忘れないかぎり、それはどこへも行かない。

後記に代えて

慣れというのは恐ろしいもので、どうなることかと思いつつながら書きはじめた今号も、なんとなく落ちつくところへ落ちついたという感じがする。こうなると、どんな訓練も別にして悪いということとはないので、言語表現の訓練もして悪いことではなかったと思うのだが、それにしてもずいぶんな時を無駄にしたような気がするし、こんなあきめくらの状態で四十年も生きなくてもと思うと、自分自身というものが、つくづく愚かなやつだと思ったりもする。

ところが、体というやつは時の重さをあまり感じていないらしい。生命は時に縛られることが少しもないらしいということが、不思議なことには有限であるはずの体と一緒にいることでわかってきた。人間の理性というやつも本質的には時と無縁の存在だが、理性が思うほどに体は時と密接に関係しているというわけでもないらしい。老化というのがどういう現象なのかわからないが、老いて死ぬのは体だけで、精神や魂は不滅の存在だというような単純な話では、どうもなさそうである。

体は非常に独特なやり方で、われわれ自身の生命に寄与しているようなところがある。それは生まれて次第に成長し、やがて年老いて死ぬという

やり方でしか表現できないなにかを表現していて、それ自身は単に表に現れるその現れ方の問題であるように見える。そういう現象を不滅の靈魂説など振りかざして切り捨ててしまうのも間違いなら、体の消滅こそ究極の結論であって、すべては消え去るむなしものだなどと、わかったようなことを云うのもまた違うような気がする。

わたし自身なにか明確な結論が出ているわけでもないのだが、ともかくこの体というものは、われわれの不可欠な相棒であって、実にわれわれ自

身であって、われわれの生命そのものである。身の分かれたるときなど存在しないし、われわれは体でもなければ、心でもない。すべてはわたしの生命のあらわれであって、実にわたし自身である。

二〇二四年三月二十八日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



中宮寺 菩薩半跏思惟